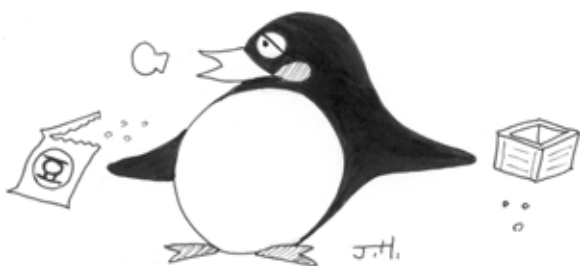


山にっこだまする

人気エッセイ「味の記憶」の続編！

昭和三十年代、九州の山村に引越してきた一年生、一太の物語



●月夜

崖治いの切り立った石ころだらけの道をバスは登っていく。九十九折の険しい山間の夜空に上弦の月と星が時折顔を出す。月明かりは山道まで届かずバスのヘッドライトだけが頼りだ。急カーブを曲がるたびに体が大きく揺すぶられ、車体は谷側に大きく乗り出しそのまま暗闇の谷底へと滑り落ちていきそうだ。

ふかしたエンジンがおとなくなるのと、ふくろうの鳴き声が聞こえてくる。はるか下からはごうごうと水が岩に砕け散る音がする。

一太は鬼が現れる夢をよく見た。いま車窓越しに見る眺めはまさに夢にでてくる光景そのもので、怖くて目を開けていられなかった。その本能的な恐れはこれから行く村がどんな所なのか、その不安がないまぜになつて、さらに一太の胸をふるわせた。

目ざす村は永らく険しく狭隘な山道が他所者の侵入を阻んできた。

住人は、切り立った山にへばりつくように開墾した棚田や棚畑でつくる僅かばかりの米と雑穀を主食とし、自生する山菜や川魚や山鳥などをとり、かつては自給自足に近い生活を送っていた。

現金収入は、山から伐りだした材木と石、炭焼き、山菜、しいたけ、茶畑

である。

村には小中学校があり、またそれが一体となった分校が二つある。運動会などの学校行事があるときは分校の生徒は山を越えて五里先の本校へと通った。

大方の児童は入学年齢の頃には家の大事な働き手として親の野良仕事を手伝っていた。

一太は幼稚園や保育園の入園経験がなく、いきなりこの山奥の学校で入学することになったのである。極度の緊張が続いたせい、いつのまにか母の膝で眠りにおちていた。

●「やっちまった」

チチ・チ…。セキレイのなき声とともに朝の木漏れ日で目覚めた。窓越しに見える山の偉容が一太を圧倒した。見上げる山は中腹に雲海がたなびき、そのはるか上に頂上が屹立して見える。その奥にはさらに急峻な山々が連なっている。

裾野の棚田にはレンゲが咲きほころび、敷きつめたじゅうたんのようになり、重にも重なりあっていた。草木のむせむせするような香りが隙間だらけの窓から家中に届く。

「うーむっ」

そのむせる匂いはレンゲばかりではない。この生温かな感じは？

「やっちまった」

一時期、小児科で「夜尿症」の疑いがあるとされ、いくつになっても寝小便が止まらなかった。しかし最近はその回数も減り、小学校に入る頃には自然と治るだろうと、親は言っていた。それで何となく自分も安心していたのだが、この大事な日にやっってしまうとは。

窓から入り込むレンゲの馥郁たる香りも、布団の中から漏れ出す生臭いアンモニアの匂いにはたちまち負けずまう。人生で数え切れぬくらい味わう現実の壁、それは寝小便の匂いに似ているのかも知れない。今日は入学式なのだ。何たることか。

「あーあ、やったとね、しょうがないわね」

いつもは雷を落とされるところだが、今日はどういわけだか優しい母。見知らぬ土地に来て入学式を迎える息子の緊張ぶりを察してのことなのだろう。

ほっと一息、敷布団と掛布団と毛布一式を庭先の物干し掛けに持つていく母に恐る恐るついていく一太、役には立たないけどりあえずは手伝おうとする。庭先の目の前には黒々とした山が一段と高くそびえていた。

「あの山は？」

「祇園山というそうよ」

祇園山は鬼の仮面のように山頂の両

端がとがり、ギザギザに稜線がうねっていた。見ようによつては大きな鬼の仮面のようなだ。

一太は昨晚見た夢を思い出した。佐土原の家の裏庭に迫る藪山、そこから妖怪の類が出てきそうな不気味さがあり、廊下伝いに離れの便所まで行くのが怖く、寝小便を垂れていた。その時に必ずと言っていいほど見る、鬼がここにも現れたのだ。目の前に聳え立つ山のようにさらにスケールが大きくなって百鬼夜行の鬼の襲来だ。

夢の中では、自衛隊の戦車なども繰り出して、鬼に対抗する。一太は大好きな大型消防車に乗って、放水で鬼たちを退散させる。その勇猛ぶりに周りが称賛する……といった、めちやくちなストーリー。その鬼を退散させる放水の瞬間が自らの放尿時。昨晩の夜行バスの夜景色が夢につながったのだ。普段はその時に気付いて起きてしまうが、長旅で疲れていたのか、朝までぐっすり眠ってしまった。幸い、姉と兄はすでに学校に登校してみたので、家にいるのは私と母だけ。二人は私と母より一足早く父とこの地に到着し、学校への転入と入学手続きを終えていた。私たちは佐土原の家の後片付けもあり、数日遅れて到着したのである。のんびりと山を眺めていた私がどこからか視線を感じる。振り向くと盛装した女の子二人がこちらを見ていた。後

でわかったことだが、二人は私と一緒にこの春入学する同級生のさち子とじゅん子であった。見られてはならないものを目撃されてしまった。新しい住まいは冬には雪景色で「銀世界」に輝くという公務員住宅で、そこに居住するご近所さんであった。その四つのマナコが「まだ寝小便小僧なの」と雄弁に語っていた。これが入学式初日のしくじりの始まりであった。

●初登校

寝小便の始末をするとそそくさと登校の準備を整えた。従兄のお下りのイートン襟のブレザーに半ズボン、開襟の刺しゅう入り白シャツは母のお手製だ。それにそそくさと袖を通し、母と一緒に家を出た。

河岸段丘の上に建つ公務員住宅から坂を下り、田んぼ道をくねくねと辿る。田畑にはレンゲが咲き乱れ、片方には菜の花畑が生い茂る。その河岸段丘の田畑から絶壁に立つと、そのはるか下には、ごうごうと岩を砕く溪流が流れている。そこに架かる吊り橋を渡り、向こう岸の河岸段丘を登っていくと、そこが私の入学する小学校だ。

河岸には樹木が溪流に追いかぶさるように茂り、学校に近づくに連れて桜や梅、椿を混ぜ合わせた並木道になっている。その道筋は子どもの足で歩いて

三十分弱。つり橋が怖かった。一人が通るのがやっとで、底板の隙間から岩にぶつかってしぶきを上げる溪流がすぐ下に見えるのだ。私が先導し、母が後に続く。どうやら母は高所恐怖症らしい。遠回りすればコンクリートの大きな橋があるのだが、私が寝小便をして後始末に時間がかかったこともあり、母が近所の人から前もって聞いていた近道を通ることにしたのである。

吊り橋を渡り急な坂を上ると、バス道にぶつかり、その向かいの丘の上に学校があった。梅と桜がないまぜで咲いている。県北の九州山地のふとろにあり、南の宮崎市に比べると気温もかなり下がり、開花時期も遅く、入学シーズンがその時期に当たっていた。

●入学式

学校への上り坂の左手に運動場と講堂があり、校舎はそこから石垣が積み上げられた二十メートルほど上に建っていた。講堂の前には戦時中の丸刈りの国民服のようないでたちの男子とおかつぱ頭の女子の新入生が既に並んでいた。角刈りの男子もいるが、長ズボン姿が目立った。どうやら半ズボン姿は一太を含めてごくわずかのようだ。どの顔も自分より大人びて見える。広瀬の悪ガキたちよりもっと迫力がある。気も荒そうで喧嘩も強そうだ。

兄からはしょうもないアドバイスをもらっている。

「よそもんはまず地元の悪ガキ連中の格好の餌食になる。必ずちよつかいを出してくる。なめられたら終わり以最初が肝心。手を出してくる悪ガキ連中の頭、雑魚(ざこ)は相手にせずそいつだけを狙え」とまあ、喧嘩の定法をいただいている。

しかし、皆がとても強そうに見える。できることなら大人しく皆に溶け込みたい。しかし、強面そうな連中がちらちらとこちらに視線を向け薄ら笑いをしている。小柄なよそもんの半ズボンにブレザー姿が弱々しそうに見えるのだろう。「どうすんべか」と自問する一太であった。

そうこうしていると、大柄なはかま姿の女先生がやってきて「はい、梅組はこつちに並んで〜」、もう一人の女先生はスーツ姿で松組はこつちよ〜と、新入生の名前を点呼しながら分けていく。一太は梅組であった。先ほどからからかうように視線を投げかけてきた一団は松組である。どうやらすぐにぶつかることはないようだ。「松」と「梅」、寿司でも会席でも「松・竹・梅」の順、梅組の方がどちらかというところらしい連中が集まっているようである。今朝寝小便を目撃されたさち子の方は同じ梅組、じゅん子は松組に入っていた。組分けが整うと梅、松の順に講堂に入

場して式が始まった。すると、一太の背中をつんつんついついてくる奴がいる。最初は何かのはずみ、気のせいだろうと思っていた一太。しかし、その間隔が早まり、つづいてくる強弱も激しくなる。そして、「半ズボンはいて刺しゅう入りのシャツで女みてえだ」とはやし始めた。隣の列の松組のあの連中が薄笑いしているのもわかる。

「なめられたら終わり」一太の頭の中で兄の声が聞こえる。

振り向きざま相手に頭突きをかまし内また掛けで投げ打つ。石頭には自信がある。広瀬時代にマサアキと鍛え上げた角力の投げ技。すかさず組み伏せ羽交い絞めから後ろに回り首絞めの態勢に。これもプロレスごっこの賜物だ。相手はすぐに泣き始め、大きな女先生が血相を変えて飛んできた。

「やめなさい、いまは入学式よ」取っ組み合っている二人の耳をつまみ上げて無理やり離れさせ、その間に仁王立ち。顔は紅潮してまさしく仁王様の迫力であった。

式がどうやって終わったかは覚えていない。その後、教室に移動し、学校の心得等の説明が終わり、喧嘩した二人だけが特別に居残りとなっていた。父母を教室外に出して三人だけのやりとり。どちらが先に手を出したかなどは問わない。

「入学式で喧嘩をするなんてめつた

にないことだから、二人ともこれを機会に仲良くしなさいね」と女先生は優しくのたまった。

相手はノボルという。地元の保育園出身で梅組の大將候補だったらしい。これが縁でいちばん仲の良い友達になったのである。

了